様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３０日現在

機関番号：３２６０５
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１３３０１６４

研究課題名（和文）　高齢期の喪失体験を統合する生涯発達的機能とそれを促進する介入プログラムの検討

研究課題名（英文）　A study of the life-span developmental function on meaning reconstruction in response to loss experience among elderly people and an intervention program to promote this function

研究代表者
河合　千恵子（KAWAAI CHIEKO）
桜美林大学・加齢・発達研究所・客員研究員
研究者番号：00142646

研究成果の概要（和文）：「配偶者と死別した高齢者の長期縦断研究」の第４回目の調査を実施し、生存対象者のほとんどが悲嘆から回復していたことが確認された。９年間で初回調査時のおよそ３０％が死亡しており、生命予後に関連する因子がコックス回帰分析により明らかにされた。配偶者との人生を語る介入プログラムが実施され、人間的成長を促進する効果が示された。このプログラムへの参加は配偶者との死別により変わってしまった世界の意味構造を再構成する機会となったかもしれない。

研究成果の概要（英文）：Most participants had recovered from grief at the time of the fourth survey in “The Longitudinal study on elderly bereaved spouses”, despite about 30 percent of the participants having passed away in the nine years since the first survey. The mortality factors were explained using Cox’s Proportional Hazards Model. The intervention program, which involves the bereaved spouse talking about his/her life with the deceased, has been shown to promote personal growth. The program appears to give opportunity for meaning reconstruction after spousal bereavement.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
２０１０年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	6,400,000	1,920,000	8,320,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：配偶者との死別・介入研究・高齢者・長期縦断研究・悲嘆の回復・生命予後・人間的成長

１．研究開始当初の背景

高齢者の多くが経験し、人生で最もストレスフルな喪失の一つとして挙げられるのが配偶者との死別である(Holmes & Rahe,1967)。

配偶者の死に直面した高齢者がその悲嘆をどのように克服してサクセスフルエイジングに至るのか、或いは病気や死の転帰へと向かうのか、について明らかにするためには長期縦断研究を行うことが不可欠である。

既にわれわれは死別の悲嘆から適応に至るプロセスを解明する目的で１６年間にわたる追跡調査を実施し、配偶者と死別後の回復過程のあり方が将来のサクセスフルエイジングをある程度予見することを明らかに

した（河合・佐々木，2004）。この研究をさらに発展させるために、2000 年に配偶者と死別した 276 名の高齢者(死別から約 8 ヶ月後)に初回調査を行った。その後、2002 年と 2005 年の 2 回にわたり追跡調査を実施し、配偶者との死別から 6 年間の適応とそれに関わる要因を明らかにするべく検討してきた（河合・佐々木，2007)。本研究の課題は 2000 年、2002 年、2005 年と行ってきた縦断調査に第 4 回目の追跡調査を加え、悲嘆から適応までの長期的プロセスを明らかにすることである。

配偶者との死別の悲嘆を克服するには 2 つの課題に対処する必要がある。一つは配偶者への愛着とその途絶に関する課題であり、もう一つは死別によって変わってしまった世界に適応するという課題である。フロイト(1917)は、悲嘆から立ち直るためには「悲哀の仕事」をする必要があり、それによって愛着対象からリビドーを解放すると考えたが、これに対して Neimeyer, R.A.（1998）は、意味の再構成が悲嘆の中心的プロセスであるとし、一貫した人生物語として喪失体験を再編することの重要性を指摘した。そして自分のライフストーリーを語ることが混沌とした一連の出来事に秩序をつける手段となるとした。本研究の第二の課題は喪失体験を人生の中に取り込み、統合、再編する機能に焦点を当て、それを検証する介入プログラムを実施することである。

２．研究の目的

(1) 本研究の第 1 の目的は、2000 年に開始した「配偶者と死別した高齢者の長期的適応に関する縦断研究」の第 4 回目の調査を実施し、死別による悲嘆から回復までの長期的プロセスと生命予後に関連する要因を明らかにすることである。

(2) 第 2 の目的は、配偶者との死別により変わってしまった世界の意味構造を再構成する機能に焦点を当て、配偶者との人生を語る介入プログラムを実施し、その効果を検証することである。

３．研究の方法

(1) 第 4 回追跡調査

① 調査対象者と調査方法

初回調査 276 名（男性 128 名、女性 148 名）のうち、死亡、転居などを除いた 200 名を対象に面接調査を行い、113 名（男性 38 名、女性 75 名）の協力を得た。回収率は 56.5%であった。初回調査から第 4 回調査までの対象者の生存状況は、生存 152 名、死亡 80 名、転居等による脱落が 44 名であった。

② 調査項目

ｉ）死別悲嘆の回復：死別悲嘆からの回復について調べるために、第 1 回調査～第 4 回調査までの死別悲嘆と回復に関連する質問項目を作成し、指標として用いた。死別悲嘆については「悲しい気持ち」「安堵の気持ち」「悔やむ気持ち」「寂しい気持ち」の 4 つの情動について尋ね、「④たびたび感じた」「③時々感じた」「②余り感じなかった」「①感じなかった」の 4 選択肢から回答してもらった。回答には得点が与えられ、得点が高いほどこれらの情動が強いことを示す。また悲嘆からの回復については、悲しみから既に立ち直ったかどうかを尋ね、「すっかり立ち直った」「かなり立ち直った」「やや立ち直った」「全く立ち直ってない」の 4 つの選択肢から回答してもらった。

ⅱ）生命予後と関連する因子：初回調査から第 4 回調査までの 9 年間について生存した期間を 1 年単位で集計し、生命予後の指標とした。生命予後因子は第 1 回調査で収集した調査項目から、性別、年齢、死別の状況（死亡までの期間、死亡予測）、適応の指標（病気受診状況、健康度自己評価、精神的健康）、死別後の心理的反応（抑鬱・悲嘆、思考・行動力の低下、不安・消極化、愛着）を用いた。なお、健康度自己評価、精神的健康、死別後の心理的反応は得点が高いほど悪いことを示す。

(2)介入プログラム

①プログラム参加者

第 4 回調査時に「伴侶と歩んだ人生アルバム」をつくるプログラムへの参加についての意向を尋ね、「参加したい」「参加しても良い」と回答した 6 名（男性 5 名、女性 1 名）を「調査協力群」とし、介入プログラムを実施した。また、配偶者と死別した自助グループに介入プログラムの参加を呼びかけ、応募した 8 人（男性 5 名、女性 3 名）を「自助グループ群」とし介入プログラムを実施した。なお分析は２群併せて行った。

②介入プログラムの実施

週に一度、連続して 5 回面接し、第 1 回から第 4 回面接までは主に下記のテーマについて語ってもらい、第 5 回面接は事後評価を行った。面接所要時間は 1 時間～1 時間半程度であった。

ｉ）私たちのプロフィール

ⅱ）出会いから新婚時代まで

ⅲ）壮年期から中年期の私たち

ⅳ）伴侶との別れ、そして現在まで

参加者の発話は許可を得てＩＣレコーダで記録し、それを元に適宜写真等を貼り入れて冊子「伴侶と歩んだ人生アルバム」を参加者と共同で作成した。完成した「伴侶と歩んだ人生アルバム」は一冊のみ印刷し、参加者に進呈された。

③効果評定尺度

介入プログラムの効果を測定するために介入プログラムの初回実施時とプログラム終了後の第５回目面接時に評価を行った。事前評価と事後評価は同じ測定尺度を用いた。測定項目は、死別の悲嘆の克服と関連する機能を捉えるために、成長感尺度、エリクソン心理社会的段階目録検査（自我統合のみ）を使用した。

なお、事後評価では、プログラムに参加して良かったかどうかを尋ね、「どちらとも言えない」を真ん中に「とても良かった」から「全く良くなかった」までの５件法で回答を求めた。またプログラムに参加した感想を「話すことは楽しかった」「思いのままに表現することができた」「思い出すことが難しいと感じた」の３つに分けて尋ね、「とても思う」「かなり思う」「まあまと思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の５つの選択肢から回答を求めた。

４．研究成果

(1) 第４回追跡調査

①悲嘆の回復

図１は死別後の悲嘆と関連する４つの情動について第１回調査～第４回調査までの平均値の推移を示している。

第１回調査で最も得点が高かった情動は「寂しい気持ち」(M=3.2)で、「悲しい気持ち」（M=3.0）はそれに次いでいた。これらの情動は死別後にほとんどの者が経験していたことがわかる。これらの情動は調査の回を重ねるごとに得点が顕著に低下し、第４回調査時にはそれぞれ 2.1 点にまで低下した。「悔やむ気持ち」は「寂しい気持ち」や「悲しい気持ち」に比べて初回調査の平均値は低く、誰でもが「悔やむ気持ち」を経験するわけではないことがわかる。「悔やむ気持ち」は第２回調査まではなかなか低下しなかったが、その後は徐々に低下していった。

「安堵の気持ち」は他の情動とは異なり J の字に似たカーブを描き、第４回調査時に最

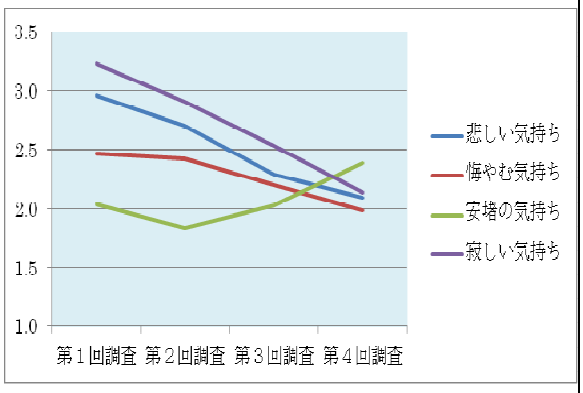

図１　死別後の情動の推移

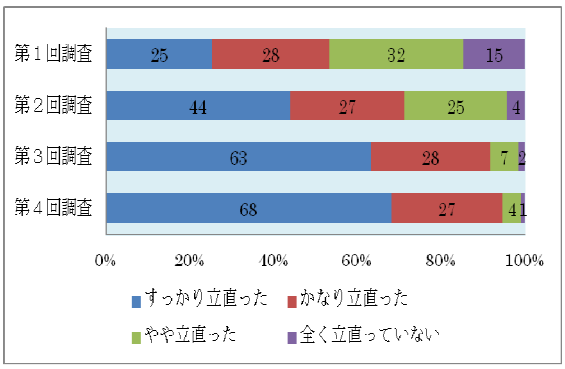

図２「立ち直り」についての評価

も得点が高かった。「安堵の気持ち」は他の情動と比べて当初は経験した者が最も少なかった情動であったが、第４回調査時にはすべての情動より勝っていたことが示された。

図２は死別の悲しみから既に立ち直ったかどうかを尋ねた結果を第１回調査～第４回調査について示した。

第 1 回調査時には「すっかり立ち直った」「かなり立ち直った」を含め、「立ち直った」とする者は半数を超えていたが、この数値は調査を実施するたびに増加し、第４回調査では 95%にまで達していた。

以上のように、第１回調査から第４回調査の生存者からの報告に基づいて死別悲嘆と回復について分析した結果は、回復へと向かう長期にわたるプロセスが明示され、第４回調査までに配偶者と死別したほとんどの者が回復に至ったことが明らかになった。

②生命予後

初回調査に参加したが、第４回調査時までに死亡していた者は少なくとも 80 名に上っていた。これは初回調査の対象者の 29%に当たる。

生存者の分析だけではなく、死亡によって最後まで追跡できなかった対象者について生命予後との関連を検討することは重要である。

生存年数を従属変数とし、生命予後因子として性別、年齢、死亡までの期間、死亡予測、病気受診状況、健康度自己評価、精神的健康、死別後の心理的反応（抑鬱・悲嘆、思考・行動力の低下、不安・消極化、愛着）を同時に投入したコックス回帰分析の結果（相対危険：RR）を表１に示した。

生命予後と有意な関連が認められたのは性別（RR=2.35，95%信頼区間:1.41～3.78，p<.001)、年齢(RR=1.10，95%信頼区間:1.06～1.14，p<.001)、死亡予測（RR=1.70，95%信頼区間:1.04～2.77，p<.05)、精神的健康（RR=1.09，95%信頼区間:1.02～1.17，p<.05)、愛着（RR=0.73，95%信頼区間:0.59

表１　第４回調査における死亡率の相対危険

予後因子	相対危険（RR）
性別(0:女性、1:男性)	2.35***
年齢	1.10***
死亡までの期間(0:1年以内、1:1 年以上)	0.66
死亡予測(0:していた、1:してなかった)	1.70*
病気受診状況(0:なし、1:あり)	0.70
健康度自己評価　(0:とても良かった)	+
まあ良かった(1)	1.01
少し悪かった(2)	0.87
悪かった(3)	2.21+
精神的健康	1.09*
抑鬱・悲嘆	0.97
思考・行動力低下	1.04
不安・消極化	0.99
愛着	0.73**

+P<0.10, *P<0.05, **P<0.01, ***P<0.001

～0.91,　p<.01）であった。

性別では、女性より男性のほうが、年齢は高齢のほうが、生命予後が悪かったのは平均寿命の観点から考えると当然である。

死亡時の状況に関する要因では、死亡予測が有意であったが、配偶者の死を予測していなかった場合のほうが予測していた場合よりも 1.7 倍死亡危険が高かった。

精神的健康については、精神的健康が悪いほうが死亡の相対危険が高かった。これには配偶者との死別によって精神的健康が損なわれ、それが回復されないままに死亡に至っていたことが考えられた。

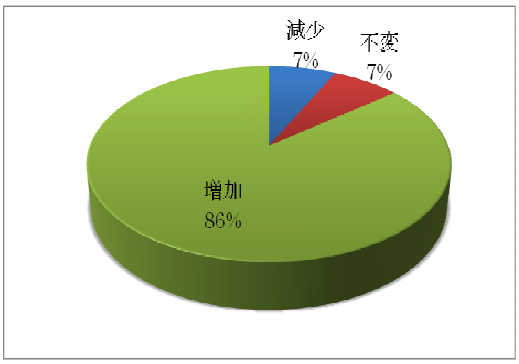

図３　成長感尺度得点の変化

また死別後の心理的反応では愛着のみが有意な生命予後の因子で、しかも愛着が高いほうが死亡の相対危険が低かった。悲嘆の古典的モデルでは喪失した対象への愛着を徐々に断ち切ることが悲嘆への対処とされてきたが、近年継続する愛着や絆の役割が見直されており、愛着が高いほうが生命予後が良好であることを示す本結果は今後の悲嘆研究に重要な示唆を与えるように思われる。

(2)介入プログラム

①介入の効果

介入プログラムの効果を測定するためにプログラムの実施前後に評価を行い、それらの得点差を見た。得点差がなければ介入の影響は認められないが、得点が変化した場合に介入の影響が考えられた。得点が１点以上増加した場合、１点以上減少した場合、不変だった場合の百分率を、成長感尺度（図３）とエリクソン心理社会的段階目録検査(図４）について示した。

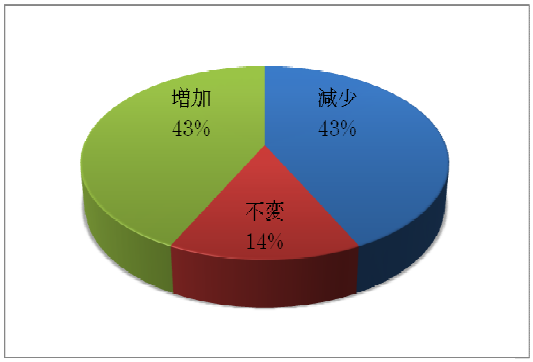

図４　エリクソン心理社会段階目録検査（自我統合）の変化

成長感尺度では得点が変化を示さなかった者は７％で、ほとんどの者は得点が変化していた。得点の変化は、減少が７％に過ぎなかったのに対して、86%が増加を示した。

介入後に得点の増加を示した者が圧倒的に多く、介入プログラムに参加することによって人間的成長が促進され、介入効果が示されたものと思われる。

エリクソン心理社会的段階目録検査でも得点の変化を示さなかったのは 7%にすぎず、ほとんどの者は得点が変化していた。しかし得点の変化は増加も減少も 43%で等しく、介入プログラムの効果は明らかではなかった。

配偶者と出会ってから死別するまでの人生を語る介入プログラムは、配偶者との死別によって変わってしまった世界の意味構造を再構成する機会となったかもしれない。このような作業の過程で喪失の意味を捉え直したことが人間的成長を促すことに繋がったと考えられる。

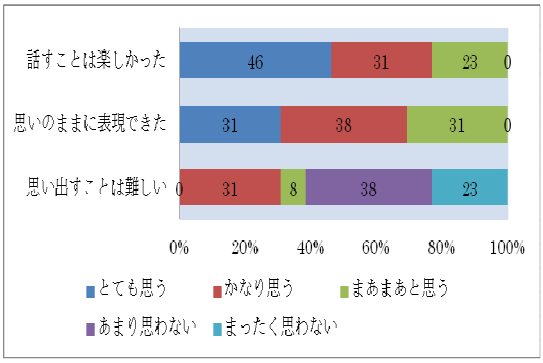

図５「伴侶との人生を語る」プログラムの感想

②プログラム参加者の評価

プログラム参加者に「伴侶と歩んだ人生アルバム」をつくるプログラムに参加して良かったどうかについて回答を求めた結果、参加者の 69%が「とても良かった」、31%が「まあ良かった」と全員が肯定的評価を与え、「良くなかった」「どちらとも言えない」と回答した者は皆無であった。

図５はプログラムに参加して「伴侶との人生を語る」ことについての感想を示した。

プログラムで「話すことは楽しかった」「思いのままに表現することができた」について「とても思う」、「かなり思う」と回答した者が多数を占め、「あまり思わない」「まったく思わない」という回答は無かった。それに対して「思い出すことは難しい」では「かなり思う」が 30%を超えていた。プログラムの参加には、思い出す努力を必要とした者もいたが、伴侶との人生を思い出し、表現することは楽しい経験であったことが明らかになった。

配偶者との人生を語るプログラムは人間的成長を促進する効果をもち、語る当事者にとっても楽しい経験として捉えられていた。今後はこのような介入プログラムが配偶者と死別した高齢者の悲嘆ケアの一環として普及することが望まれる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

① Chieko Kawaai, A revised and shortened instrument for measuring psychological response to spousal bereavement among the elderly, 2ND International Congress on Gerontology and Geriatric Medicine, 2012.2.25-29, University College of Medical Sciences (Delhi)

② Chieko Kawaai, Ryotaro Takahashi, Effects of creating a “Life Story Book” on psychological measures among frail elderly in Japan, Ninth Asia/Oceania Regional Congress of Gerontology and Geriatrics, 2011.10.20-29, Melbourne Convention and Exhibition Center

６．研究組織

(1)研究代表者

河合　千恵子（KAWAAI CHIEKO）

桜美林大学・加齢・発達研究所・客員研究員

研究者番号：00142646

(2)研究分担者

佐々木　正宏（SASAKI MASAHIRO）

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：50162384

（H21→H22，H23：連携研究者）

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：